

## 第三節 『巨匠帖』全訳

以下の翻訳では、口語調を選び、初めての日本語全訳を試みた。クローネルの文体に關しては、現在のドイツ語と全く変わらない言葉で、古めかしい語彙や文語調のドイツ語が、いじりも見当たらない。一方、『巨匠帖』が書かれた大正一〇年といえは、日本語の自由律の詩においても、三行一致体が確立した時代である。したがって、山内謙雄氏の文語訳に対して、いじりもえて口語調で翻訳したこの意味は、十分納得していただけるものと思える。

冒頭二〇章の訳は、本論文第 部 第一章 第一節と第二節に発表した翻訳と同じものである。作品番号に關して、クローネル作の初版に記載はなく、筆者によるものである。また、作品番号の後「――」とあるのは、日本の連句論として「句付風」の付合が認められたというを示す。

### 第一卷（初版一冊目）

一

薔薇が言う

君はわたしを薔薇と呼んでいる

しかし君がわたしのほんとうの名を知らない

わたしはたちまち聞れるだろう

二

口牡丹の芯にあるもの

それは色ではなく

色の思い出

それは匂ではなく

匂の思い出

三

藤よ

おまづがさんなしたくせんの花をつけたししても

わたしたちはその回し蛇の絡み直しを

認めざるを得ない

四

藤と杉

千の手で死の巨人に縛られた命のソトには

もう登り死に感謝する

五十一

石の巨座の地感尊

真昼の激しうまた光に目を閉じた眼のまごじ

目を閉じていらつしやる

六

食し折

地感の頭の上に釣合をうつてのせられた石のまごじ

おほつかなく

七

織物師のまごじ

わたしは魔法の杖をもつて

太陽の光線と闇の糸を結びつける

八

お目様よ

一匹の蛙が池に飛びこむ

ちるし

高い空で

月は笑い

笑いすそで

眼がしらを繻の八ノカチでらしている

九

地感尊の頭の上に山積みされた石

そこに最後の小石をのせるものは

盲人ではないまごじ

十

夜

石の仏に類書せて

唇のこちらの炎熱を

感じてらん

十一

今

唇のこちらの炎熱を

響け神に身を近づけて

感じてらん

十二

耳を寄せて聴いてほしい  
神の胸の熱意が滲えるまで  
どんなに時間がかかるか

十三

神様が言う  
藤はものをいまいしめるじぶがで老なじ  
それができるのは蘆薈と蘆薈の葉だけ

十四

牡丹花  
わたしたちの心のついで  
思考に先立つ  
真紅のいろ

十五

夕ぐ蘆薈酒が降ってきた  
仕方がない  
薔薇たちはそのじぶを語りつづける

十六

今夜  
床について  
見るよ  
わたしの手は壁にもの影をぶかいている  
足が出た

十七

月に真じた  
あの影  
無体物となる  
雪のよつに

十八

わたしは世界の涯から来た  
長谷寺の白牡丹の影底に隠れている  
淡紅のなにかを見るために

十九

紅  
肉にしみ入る血のいろ

- 二十 塵にしみ入る思念のころ
- 二十一 ほろの花だけは  
永遠を奏すほしじ  
脆いものである
- 二十二 そじはかとなき淡紅のころ  
それは色しいつよりは  
むしる鳥吹
- 二十三 じの句を  
知るつとあるせい  
目を開くはけはならぬ
- 二十四 わたしたちは目を開く  
するじ  
薔薇の花が言ひ  
わたしはじじにじまゆ
- 二十五 旅人よ  
近づいてくれ  
そして  
ついで  
すぐの終化を忘れさせてくれるじの句を  
かいてくれ
- 二十六 ひそかに  
内心に  
懐ひと呼んでくるもの  
それは一瞬間のかなきつない  
それだけがほろの花である
- 二十七 わたしたちはもう一瞬目を開ける  
ほろの句がきこわれて

二十七  
ばらの花は消えてしまった

園子  
詩人の言葉より残るもの  
ただ  
そのよき

二十八  
ばらの花  
紅珊瑚の掛け橋を  
渡つたところ  
もつ戻るじつがてまなし

二十九  
ばらの花  
その赤ちはあまりにも強く  
葡萄酒のまじり  
じつに赤血(じま)が残る

三十  
血の赤ちに染らなほし  
牡丹は白し

三十一  
地上二面に  
雪は雪のための  
雪の絨毯を敷く

三十二  
滝の向いつ  
淡紅や緑色の  
細なかい妖精が  
横たわり  
笛を吹いている

三十三  
銀の笛の音色に  
ギヤムへの笛の音色が  
混じり合つ

三十四

緋いろ  
色といつものは  
黄金の蒼色

三十五

独り行く  
口に一握りの芥  
目にはあの山真にみえる  
雪の斑点  
午後三時

三十六

秋を語るのばどつしても無理だ  
今もなほ春の酸っぱい笛の音がわたしの耳に残って  
わたしの口には唾があられるばかり

三十七

目は  
この一行を越えて  
すでに  
もう一行を読み取る

三十八

響いろの  
稜線の奥に  
鳴りやまない  
暗い雷鳴

三十九

最初の稲妻が地球全体の写真を撮る前に  
野鬼は先祖の祭壇に一粒の香を燃やす

四十

線香は  
わたしが書いている  
この一行のよこに  
半分は灰  
半分はけむり

四十一

香が溶けて残るものは

ただ  
そのけむり  
けむりが消えて残るものは  
ただ  
その匂

四十二

森の中  
忘れられた臺に  
白いともじり

四十三

ああ  
この世界はあまりにも美しく  
いかに朝から夕まで  
身じる老でまなひ人を置かなければならぬ

四十四

地蔵尊  
頭の上に小石二つを載せて  
身じる老でまなひちつじつおくれ

四十五

夜  
そして真夜中  
ひとりの盲人が  
眠りたがっている

四十六

小さなお母さんは手足で走り  
風を引ひ張り取る  
そのころで  
お父さんは口を明けたまま  
風は飛びつづける

四十七

懺悔か言ひ  
わたしを守るもの  
それは刺ではなく  
わたしのかおりです

四十八

鉢のそばにござくもいた  
猫じのは  
樽目をあけて言ひ  
吾輩は魚がまらうです

四十九

ひもをすいて幼子を抱く  
やあら立ち上がることしたら  
立ち上がれないほどの  
その重さ

五十

頂(つぼみ)に両手を置いて  
樹の間にかんざしを挟んで  
女は締めを見る

五十一

わたしは  
自分のお子様じ  
敬礼する

五十二

真紅の椿  
赫灼とした  
冷たい思念のよつじ

五十三

ひと筋の日の光  
渦巻く雪のなかに

五十四

一色の椿  
雪のなかに現れた  
赤ら顔の女の百姓

五十五

下駄履いて  
まるまると行く  
雪を  
その最初のひょう雪

五十六ー 掴もつししながら

五十七 死んだ月のなかに  
生きている  
鬼がいた。

詩興を失った  
詩人は  
盃の酒に  
鉤(はり)もなく  
魚を釣つことする

第三巻(初版 冊目)

五十八 一本の指に採んで酒杯を挙げる  
唇は  
おもむろに  
ひとりでに  
開いてゆく

五十九 老詩人は  
おもむろに  
若沙弥(くしやめ)が込み上げるよつな  
一句を詠む

六十ー 山の天辺まで  
見に来たもの  
それは海ではなく  
あらゆるものの停止

六十一 夜明け  
男体山は目黒山く向け  
大きな釜の矢を放つ

六十二 釜砂子まじる

- 六十三  
かすみのなか  
現れた  
神のすがた
- 六十四  
銀砂子まじる  
かすみのなか  
巫女の影は  
鈴の幣(ぬき)で音を撒き散らす
- 六十五  
太陽の巫女は  
天秤の一方の皿に座っている
- 六十六  
神様は  
わたしたちが太陽を礼拝するよつじに  
月を用意してくれた
- 六十七  
地球上最初に現れた神々は  
犬や兔の頭をしていた  
粗布の上つ張りを着ていた  
大きな草履を履いていた  
いわば百姓のよつな神々だった
- 六十八  
湖の一方は  
日の出  
もつ一方からは七頭の大蛇が這って来る
- 六十九  
わたしは自分のお子様<sup>みこさま</sup>に敬礼し  
それにより  
夫の先祖様に敬礼する
- 七十  
豊曇原の  
真中に立ち  
初代の帝は  
その国原に耳を傾ける

七十

束の間の  
一滴の涙  
日の光を横切り  
この世を去る

七十一

世を捨てた帝は国原に耳を傾ける  
もしかするし  
滝は突然  
止まるかもしれない

七十二

はじまるもの  
おわるもの  
その中間に  
詩人の目は人に見えぬ一粒の何かを掴み  
そして 刺されてしまふ

七十三

屏風  
ここはすべてのはじまり  
ここは世の中のおくてか  
至純の黄金におじがれるとじらだ

七十四

自然のすべては  
黄金から浮かび上がる  
永遠から発出して

七十五

観世音の祭壇  
線香の先の  
灰と匂いの境に  
白熱の一点

七十六

漆を塗って  
永遠に変わらぬ液として留めてもまだ  
この麗日

七十七

園子  
風に載せて詩を書く

七十八

八尾  
百千(もまひ)に蟬聲が群がるなかに  
日暮三つ

七十九

つづきを観たつづきなき者は  
激流のひびきを聴くつづきがたねなつたつづ

八十

郭公鳴く  
わたしたちのいない所を  
示すかのまことに

八十一

この扇の一端から  
春の始まり  
もう一端から  
春に追われた  
秋の始まり

八十二

帆を張った  
この小さな船  
いくつかの文字とつづ  
荷をのせて

八十三

園子の弧は地平線で  
妻(かみめ)の姿はわたしの目である

八十四

わたしは  
一年の十二ヶ月を左手に抱いている  
好きなふちに  
園子の十二本の髪をばらして  
そして寝る

- 八十五 聞くじじがでまる
- 八十六 船乗りは六分儀で空を観測する  
詩人もまた  
手に扇子をもって  
万物をじじのえる
- 八十七 秋もまた  
なにかのほじまりなのである
- 八十八 会話を  
扇子と  
屏風と
- 八十九 幻の世から  
空気を送り出そう
- 九十 白い霧に  
一何を いや  
空白のかけらを  
不可視の霧にのせてあなたを送ろう
- 九十一 クリスタルのよつな  
冬の  
ひとときの不安  
そとで  
窓簾子が粉々に砕け散った  
ほら  
万物の再出生である
- 九十二 舞に混じった雪溝の花々  
若い豊姫の行列のよつに  
そろそろと溝に沿って  
東京の入口までわたしを迎えに来た

そして二にまで連れてきてくれた

九十二

市場へ向かってゆく農婦の行列のちりに

暮瀟の花々は

とらふとらふ書く

たまには顔色く

この道に沿ひ

永遠につづく

九十三

わたしは聴く

水源へ逆巻き戻る

激流のひびきを

九十四

この世の農地は

長いあいだ使われてきた

不思議なことに

まだ穴があいていない

九十五

万物流転

目を閉じて

聴くと

ただひとつ

激流のこえ

九十六

前も後ろも

小川の流れ

その生命(いのち)の

ひとつもひとつも

語り合つ

九十七

おもひにはおもひを

頬には頬を寄せて

九十八

森の奥底には

老詩人の思い  
いねば黄金の苦しみが  
あらわれた

九十九

じつと動かぬ  
万縁に  
木(じ)の下闇があり  
そこに  
あなたの深紅の叫び

百

闇と光の境目  
未だ今日ではない  
今は 老のこのた

百一

しつ、黙れ！  
音を立てると  
時間(とき)は再び  
流れはじめ

百二

死と折衝を書ねゆく  
死の申出を吟味してゆく

百二十一

正義をみたよこな  
爽快な  
秋の一日

百四

窓から  
日の出の光  
霧が晴れると  
燠(あま)と炎の御国があらわれる

百五十一

杉と藤  
くスクリスの園に入ったくらくと  
どどの大蛇

頁六

大いなる 清らな  
一基の柱  
たちまち木(二)の下闇に姿をかくして  
黄金の御(め)足だけをみせる  
初瀬寺(はつせの)の観音よ

頁七

杉よ  
わたしには登るじつのできない木塔  
その真下に嘆く

頁八

蓮の葉に転がる水滴のまじり  
この詩もまた  
おちらいちらい  
定めなく  
紙面に転がってゆく

頁九

詩にひそんでいる数字のまじりもの  
計算不可能であるがもし

頁十

胸中に身を灼くこのおもひは  
空しく  
言葉に成ることある

頁十一

この詩を囲んで  
小さな詩のおもひが  
形容詞... 頭文字..  
輪をつくって生まれてゆく

頁十二

牡丹の芯  
蜂は爽快に  
黒いコルセットより  
至福の毒針を  
入れたり出したりする

百十三

はらの花の中  
蜂は死ぬまで恋して  
近づく君を刺すのだ。

百十四

数字にならない  
目に見ない じのかおり

第三卷（初版三冊目）

百十五ー

墨  
精神の樹液と  
思考の血

百十六

扇の風よ  
言葉を吹き散らせ  
心をつちものだけを  
おくりたまえ

百十七ー

東京に向かっているまぐこの道の  
皇溝（みぎの）の列は  
まき出した  
天皇崇敬にやってくるのだ

百十八

皇土  
羽衣を身に纏つ  
日本の天使よ

百十九

皇土  
神の玉座のまじに  
雲海に運ばれて  
はかりしれない皇をより  
わたしたちまで  
進んでくる

百二十

右から 左から 下から

わりハボアの浮雲の渦巻が引き裂いた  
そこで雪は  
山々を下し  
み雪に覆われたまま  
凍り付いた空に  
あらわれた

百二十一

朝四時  
水に墨濁酒が混じるように  
光に色が  
月に太陽が混じってゆく

百二十二

夕方四時  
空に耳にいつ闇の種  
おもむくに光りゆく

百二十三

月の足跡  
地球の果てから地球の果てまで  
眠りの道をえがいてゆく

百二十四

悟りたまえ  
語り終えてはじめて  
君の心耳(こゝろ)にひびく  
この瓶を

百二十五

耳に聴く  
目を閉じて語る ある人の声がある

百二十六

ひとつの思いが触れて  
水に蹴ひとつ

百二十七

早起きせよ  
夜の大窓のかけらを  
ちりちりお捨つために

百十八

発言することもなく  
言葉のかけらを  
無口の鯉にくれる

百十九

米が米の味になるには  
沢庵のひとかけが要る

百二十

梅干一個をえれば  
米は米になる

百二十一

金木犀 銀木犀  
炎と光の交わり

百二十二

日本列島は  
長い夢のまごじ  
昇る日の一措(ひら)にふれて  
身を震わせている

百二十三

庭園とは茶碗のまごなもの  
観たい所を掘り出して  
そこで  
風景全体のかおりを  
その妙薬を愉しむがまじ

百二十四

線香も  
恋もまた  
一点に燃え  
やがておちえらねない  
このかおり...

百二十五

たぬしに  
石塊(いしがら)をもちて  
海と空戦をしてみた

百三十六

この風景を吸い終わった今 息を殺して  
筆を執る

百三十七

救いの海へ  
小舟を象眼した錆いゝの錨を奉納しよう

百三十八

身の回り  
網につけられた浮子(うき)のよつな唄々  
尺ぞえ網にかかった

百三十九

いねぞ未知の神業  
運命のトコハグットに耳を傾けなごい

百四十

大地を踏みながら踊らう  
足をひびかせて  
そして次は  
足をそと  
地球のつえ

百四十一

万物の成長と  
繁殖とつむじ  
急ぎ  
急ぎゆく  
春の踊り

百四十二

墨  
漆黒の汁に  
歓喜あり

百四十三

墨  
ちなわち  
金の凝(しじ)つたもの

頁四十四

葉隠れに  
川の流れ  
筆を手に  
黄金のさそやまを聴く

頁四十五

厳肅に  
悲しそつに  
長い詩を朗誦するもつに  
大自然はものをいつ

頁四十六

肉欲といつ大木  
それは巨大な桜の老木である  
薄紅の吸盤があり  
濃紫の書がある

頁四十七

黄金の透気がすか  
それは風景の結晶  
太古の湧き  
湧き出る書ひし  
永遠の美し

頁四十八

水の上に水の音  
葉の上にとらに葉のかけ

頁四十九

雨はよつやく書となり  
泥はよつやく筆となる

頁五十

士でできた小さな器  
樹液を少し入れて  
飲むつ

頁五十一

長旅の果て  
草臥れた長老のよつな

桜の老木に逢い  
念願の祝福を  
頂戴する

百五十二

境内のかげりに  
何かが起る...  
銀の神鏡に  
炎が生まれる

百五十三

松葉の先の  
雨粒ひとつ  
落ちて海に入り込むこと  
揺れている  
さあ 出発だー

百五十四

水田の真ん中  
渡り板を踏み出し  
濁水の激流を渡る

百五十五

京の街より  
青い煙が立ち上がる  
思い出も一緒に飛び交う

百五十六

雨後の海  
松一本  
そこに  
雨粒ひとつ  
海は遠くから  
人目を忍んで  
雨粒を包囲する

百五十七

雨後に  
ひと筋の太陽の光  
雨粒を身に纏った

松一本  
湖面にかげを落とす

百五十八ー

窓を閉じる  
空間を縮める  
ちばやくして 動かずじ  
鳥の糞は吸い込まれて消えてゆく

百五十九

褐色(かみじり)の  
濁り水に  
鴨の綿毛  
一本のみ

百六十ー

いやでも  
いやでも  
鐘は響く  
わたしの心の底の四つの壁をゆらめかせて

百六十一

いれでも  
いれでも  
木の間に煙が立ち上がる  
生け簀の儀式

百六十二

m  
翼二つ  
天使がやってくる

百六十三ー

眼にも  
耳にも  
濡れたよつなじば  
じじばの内側は  
兩粒のよつなものが

百六十四

秋

小川の輝き  
そして たらに  
菖菊(あむぎく) ひと株

百六十五

気が付けば  
黄金(あうごん) はミルクのよもぎに  
甘美なものだった

百六十六

雨粒ひとつ  
大海の透澄に  
ひかえてゆく

百六十七

はらの花は土に立つもの  
菊の花は霧から着るもの

百六十八

はきたまえ  
透き通るよもぎの薔薇酒し  
黄金の知性を

百六十九

臉(まがた) をあげ  
両目(りょうめ) に雨粒ふたつ

百七十

神は  
一瞬にして  
わが心のつちの  
雨粒を摘んだ

百七十一

開かれた社(やしろ) の奥底に  
神鏡に  
あらわれた  
雨粒ひとつ

百七十二

もし  
わたしを日本から

切の難心

金田正太郎 〇〇〇〇